

# ドム語第二ドム方言\*

## The “Number Two” dialect of the Dom language

千田俊太郎

TIDA Syuntarô

### 1 はじめに

ドム語はグミネ地区とシネシネ地区にかけて広がっているドム地域、及びグミネ地区のエラ地域で話されている。話者人口は 16000 人ほどと推定する (Tida 2006)。ドム語の方言は地域によって以下の三種に分けることができると考えられる。

- (1) a. グミネ地区ドム地域 (第一ドム=ドム 1 方言)
- b. シネシネ地区ドム地域 (第二ドム=ドム 2 方言)
- c. グミネ地区エラ地域 (エラ方言)

ワギ河を挟んでグミネ地区側のドム地域が通称 Namba Wan Dom (第一ドム) でディキネ山 (V/Dikne) を中心に丸く広がっている。シネシネ地区側のドム地域が通称 Namba Tu Dom (第二ドム) でカウル山 (V/Kaul) のワギ側の面を中心に広がっている。ドムの氏族を大きく八つに分ける時、そのうち七つ (NNon=「Ku、VKurpi、VKoma=「Ku、NKum=「Ku、Mlai=「Ku、NGor=「Ku、VKopan) が第一ドムに分布してをり、第二ドムに居住するのは「Kwiwa=「Ku のみである。言ひ傳へによれば「Kwiwa=「Ku も現在のグミネ地区側に居住してゐたものがある時移住したものらしい。

本稿ではまづドム語による口承傳統、つぎにドム 1 方言と比べたドム 2 方言の特徴を記述し、最後にドム 2 方言によるテキストを付す。

### 2 ドム語の口承傳統

ドム地域の口承傳統はドム語では Nkuria と Vkaman の二つのジャンルに分類して記述するのが適當である。二つのジャンルを表す語彙は、以下に述べる如く、どちらも多義的で

---

\* 本稿の記述の多くは科学研究費補助金「ドム語の民族誌的言語資料の調査研究」(代表者: 千田俊太郎、研究課題番号: 20720107) によって可能になった。本稿のテキスト蒐集は「文部科学省委託事業 日本/ユネスコパートナーシップ事業」の支援を受けた。記してここに謝意を表す。

あり、また即興的な側面を含む場合があり、厳密に同一の内容・形式を保つたまま継承されゆくべきものではない。

## 2.1 Kuria

᠒Kuria は「呪文」と「歌」の両義があり、その區別はドム語話者も明確に把握してゐる<sup>\*1</sup>。「呪文」には戦鬪の勝利を祈念する ᠒kuriā ᠒npn と盗みを懲らしめる ᠒bika ᠒kuriā があつた。どちらの習慣もキリスト教の普及とともに急速になくなり、現在その内容を知る者は見つからない。「呪文」の ᠒kuriā はすでに消滅したか消滅の危機に瀕した文化と言つてよい。もしその知識を持つものが見付かれればおそらくはその人が最後の継承者であらう。ただし ᠒bika ᠒kuriā に関連する習慣の一部に今も続くものがある。

作物が盗みの被害に遇つた時に、ある種の羊齒 (᠒bika) を摘み取り、その葉に向かつて吹き込む呪文が ᠒bika ᠒kuriā である。呪文を吹き込んだ羊齒は盗みの痕跡、例へばバナナの房の切り取られた痕の部分に結び付けられる。呪文により、盗みをはたらいたものが更に大きな悪事に關與し、最終的には盗みをはたらいた者が誰だつたのかが明らかになるとされる。現在では ᠒bika ᠒kuriā を知る者はないが、盗みの痕跡に羊齒の葉を結び付ける習慣は残つてゐる。

「歌」の意味での ᠒kuriā はかなり廣く「歌一般」を表せる (以下に記す例外がある) が、特に ᠒ge ᠒kau ᠒dugwa と呼ばれる求婚の歌が典型的な傳統 ᠒kuriā として擧げられる。求婚歌は通常クマン語の歌であり、相手の部族名や出身地を即興で盛り込んで男集團が一人の女性に向けて齊唱するものである。

## 2.2 Kaman

᠒Kaman はお伽話の類に屬する ᠒kup ᠒kaman と訓誡に關する ᠒krn ᠒kaman の二つに分けられる。單に ᠒kaman といふ場合、ドム 1 では訓誡を表はすが、§4.1 の冒頭に現はれるやうにドム 2 ではお伽話を表はすことができる。

᠒Kup ᠒kaman の特徴は、1) 子供だましの虚構とされ大人にとって價値がないものと見做

---

<sup>\*1</sup> ドム語の ᠒kuriā と同源のクマン語キンデCOND方言/᠒kudia/は戀の呪術のみに關係する。Bergmann (1966) の辭書項目「kundia, kundia si-」には「女性あるいは少女を誘惑したりその氣にさせるために行なふ蠱惑呪術、その呪術を行なふこと (成人した未婚、既婚の男なら誰でも保有する)」(Liebeszauber, - machen / um Frauen oder Mädchen anzulocken oder willig zu machen (Trägt jeder erwachsene Bursche und Mann), 引用者が一部表記を改めた) とある。誰でも知つてゐるやうな呪術がドムにもあつた可能性があるが、現在は残されてゐないと考へられる。一方、歌の意味のドム語 ᠒kuriā はクマン語キンデCOND方言で/᠒giglage/ (辭書項目としては「giglagge」と表記) に相當する。なほ、トビアス・パウアー先生にドイツ語に關する助言をいただいた。有り難うございます。ただしありうべき誤りは全て筆者の責に歸す。

されること、2) 即興的な要素が多く話の全體が語り手の創作の場合すらあること、3) 特定の歌が差し込まれるものがあること、4) 出だしと終わりに字句通りの意味では解釋しがたい決まり文句があることである。

「Kup Vkaman の特徴について順に少し詳しく述べる。まづ、「kup Vkaman に分類される話を古老に請ふと、「Kup Vkaman なら子供の方にむしろそのストックが豊富にある」と言はれたり「あんな子供の話をしてほしいのか」と笑はれることが多い。「これは嘘の話だぞ」と念を押されることもある。

また、「kup Vkaman は子供が自身の創作を語り合つて遊ぶことでもある。このやうに、「kup Vkaman はそもそも個々人の創作による部分、即興的な部分が多い。その傳承の本来の在り方を探るには今少し調査が必要だが、これまでも内容自體は變更、新たな創作を加へられながらジャンルとして繼承されてきた可能性が高い。一方で、しかし、ドム地域を超えて同一内容が廣がつてゐるものもあり、傳承されてきた民話の中にはあるやうである。

歌の挿入された民話は4節に紹介する話の最初の二つの「kup Vkaman に見られる。「Kup Vkaman に現はれる歌は、なぜ登場人物が歌ひ始めるのか不明だつたり、また歌詞と話の筋との関連も見出しがたかつたりすることが多い。例へば §4.1 の /apal /aye, /kola /mle /ple /na /sno /nl /mumu /kan /mumu といふ歌は話の流れと歌詞の意味はつながりを見付けられない。起源的には、もともと他の民話の挿入歌だつたものを別の民話に差し込んだものもありさうである。例へば §4.2 は Tida (2002) の Palele の筋と似てゐる。§4.2 の yopa moke dala nalo parwana parwana wena といふ歌の歌詞はこの説話の中では意味が分からないが、よく似た歌詞の歌を折り込んだ Palele の中では民話と歌詞との關聯は明らかである。民話と歌詞との不整合は語り手の個人的な誤りである可能性もある。しかし、このやうな不整合は頻繁であり、また特定の語り手にのみ見られることではない。なほ §4.3 は「kup Vkaman ではなくジャンルの名前がない傳説であるが擬音にリズムカルな部分がある。

「Kup Vkaman の出だしに特徴的な無意味句は「ker /ker /di であり、終わりに特徴的な無意味句は「kupa /aipa /bl /tol /tal である。前者は今のところ全く語源が辿れないが、後者は「kupa (眞菰の類<sup>\*2</sup>)、/aipa (小さな葉野菜<sup>\*3</sup>) を合はせた「kupa /aipa (日常的な野菜) といふ表現が見てとれるほか「bl /tol (火がぱちぱち爆ぜる擬音) と關係のありさうな音素列が

<sup>\*2</sup> Hide (1979: 22) ではニマイ語 kuba を *Setaria palmifolia* とし、「With *aiba* (*Rungia klossii*), the most common vegetable eaten with the staple, sweet potato, throughout the year (shoots eaten)」とある。記述内容からドム語の「kupa と同じものに言及してゐるものと考へられるが、植物の同定に疑問が残る。*Setaria palmifolia* は日本の笹黍(ササキビ)だが、「kupa は肥大した根元の芯を食用にするところなど眞菰(マコモ)にむしろ似てゐる。ただし、「kupa の葉付きは笹黍にも眞菰にも似ない。

<sup>\*3</sup> /aipa は *Rungia Klossii*。ニマイ語の *aiba*(Hide 1979: 11) やクマン語キンデコンド方言の /a.lba に同じ。

入つてゐる。しかし、それがなぜ民話の終りを示すのか不明である。

Ŋkrn ʋkaman は「殺すなかれ」「盗むなかれ」「鋤を持って畑を耕せ豚を育てよ」といつた訓誡であるが、それに理由付けがなされる場合も多く、中には社会的信念体系の理解が必要な部分がある。例へば「女と寝たあとに川に下るな」といふのは「balm Ŋkai (川邊に棲む魔鬼)の標的となりやすいからである。ここに Ŋkrn ʋkaman の一部として「balm Ŋkai による被害の事例報告が補足的に語られる場合がある。その内容は民話的なものであるから、Ŋkrn ʋkaman は訓戒にとどまらぬ廣がりを見せる部分があるわけである。ただし、Ŋkrn ʋkaman に含まれる話は全て事実と見做され、歌の挿入はなされないなど、「kup ʋkaman とは峻別される。

メラネシア社会は一般に階層分化がない平等社会とされる\*4。ドムもその例外ではない。いはゆるニューギニア高地のビッグ・マン(大小の集団において指導的な役割を果たす者)は、少なくとも筆者のドムにおける観察においては一般の人々と若干の相対的な違ひしかなく、絶対的な権威を持つてゐない。指導者格の者に期待されるのは主に雄辯さである。長幼男女の別は少々尊重される。また伝統的な信仰は必ずしも道徳的な側面を強調しなかつたやうである。以上の特徴をもつドム社会において Ŋkrn ʋkaman は倫理規範として重要な役割を果たしてきたと考へられる。しかし、この地域ではキリスト教の傳來後、キリスト教が倫理意識を形作る主要なものとなつた。Ŋkrn ʋkaman は若い世代には、昔語りとして認識される傾向がある。おそらく今後、このジャンルの継承は脅かされてゆくことになる。

## 2.3 その他

ジャンルの名前のない傳承には、ドムの起源に関する話 (§4.3) などがある。ドムの起源に関する話の場合、内容的には「kup ʋkaman とほとんど區別が付かない。しかし、形式的には出だしと終りの決まり文句がないことが、また事實の傳承と見做されることが「kup

---

\*4 Brown (1970: 99) 「Melanesian communities are small, unstratified, and the ties between persons and groups are established and maintained by gifts.」

Brown (1970: 111) 「A Chimbu 'Big Man' is an organiser, mobiliser and stimulator of activities. He has a large household, and many people are associated with his household who support, contribute and make his large participation possible.」

大塚 (2002: 17) 「ニューギニアでは、ポリネシアの広域やメラネシアのフィジーなどで發達した首長制はみられないし、いわんやアジアやアフリカの多くの地域にみられる王国のような広域に及ぶ統治機構が發達したことはない。ニューギニアの傳統社会で、政治的リーダーとしてよく知られるのは高地で広くみられるビッグ・マンである。ビッグ・マンは、ポリネシアなどの首長が生得的に決定されるのとは対照的に、自己達成的で個人の能力と努力により獲得される」

Vkaman と大きく異なる点である。

本稿に収めたドム起源説話には豚祭りの場面が出て来る。豚祭りはニューギニア高地に廣く行なはれてきた儀禮である (Nilles 1950, Brown 1970, 吉田 1972, 1974)。暦のない社會であつたから完全に定期的な行事ではなかつたはずだが、Brown (1970: 104) の推定では、シンブーでは六～十年のサイクルで豚祭りが行なはれてきた\*5。ドム地域では 1986 年に最後の豚祭りが行なはれたといふ\*6。その際には、豚祭りの負擔が大きくなりすぎたためにその後は行なはないことがすでに諒解されてきたとのことである。シンブーの豚祭りは宣教師や文化人類學者の手によつて記述がなされてはゐるが、現地の多くの人たちにとつて、このやうな説話を通じて接するだけのものになつたのである。口承傳統の重要性はここにも見出させる。

その他、言葉に關する文化的習慣に *Nkai Vtom* と呼ばれる死者を哭する際の歌がある。この歌はドムにとつては *Nkuria* の一種とは見做されず、決まつた歌詞もない。節回しが暗黙的に共有され、それに合はせて主に女性が即興的に悲しみを歌にするものである。

ドムにおける急速な變化と傳統の消失は西洋の物質文明の流入とキリスト教の到來が大きく關はつてゐることは事實である。ただし、現地では、多くの傳統の拋棄が宣教師の強制によるものではなく自主的に行なはれたことがむしろ強調されてをり、またシンブー社會が過去にも現在にも變化しつづけてをり、進取の氣性に富む人々がその文化を支へてゐることは押さへておかなければならない\*7。

### 3 ドム 2 的特徴

筆者が最も長く關はつてゐる方言はドム 1 の氏族 *ノン・ク* (*NNon*=「*Ku*」) の話すものであり (1997 年より調査)、この氏族と隣接する地域に居住する *コマ・ク* (*VKoma*=「*Ku*」)、*クム・ク* (*NKum*=「*Ku*」) の諸氏族もそれほど大きく異なる方言を持たないことが確認されてゐる。この方言を以下ドム 1 ノン・ク方言と呼ぶ。ドム 1 ノン・ク方言は主にクマン語諸方言と隣り合ふ地域で話されてをり、いくつかの特徴から、ドム語の中ではクマン語の影響が強

\*5 「The pig ceremony (*bugla gende*) is the largest collective activity of a Chimbu tribe[...] I have estimated that the Chimbu hold a pig ceremony approximately every six to ten years.」

\*6 ドムの最後の豚祭りについては筆者の言語調査の相手をしてくださるドム 2 の方々に伺つた。

\*7 Brown (1972: 121) 「Chimbu have never felt that their way of life was stable and unchanging. All of their beliefs and traditions, their language, their social relations, their transactional society rest upon a fundamental premise that people constantly adapt and change with external conditions, interpersonal and intergroup relationships. There is no image of a fixed universe or social structure.」

畑中 (1975: 251) 「メラネシア文化は一般にいて、その変化に対して開放的であること、折衷主義、文化の枠組の伸縮を自由にするという特徴がある。」

い變種と考へられる。2008 年から數回、ドム 2 に調査に入る機会を得たが、ここでいくつかドム 1 ノン・クとの方言差を認めることができた。ただし母語話者は相互傳達に全く支障を感じてゐない\*8。ドム 2 の方言はドム内では對岸のドム 1 地域のゴル・ク (ɲGor=「Ku」) 氏族の話す方言やエラ地域のエラ方言などと最も近い關係にありさうである。しかし、現在のドム 2 はシネシネ諸方言に圍まれてゐるためか、それらとも共通する特徴を多くもつ。ドム 1 ノン・ク方言と異なる特徴について順に述べてゆくことにする。

### 3.1 音素とその實現

音素の實現については次のことが言へる。

- (2) a. /b, d, g/が前鼻音化閉鎖音で實現しない。
- b. /g/が/w/の前や/p/の後で頻繁に脱落する (任意)。
- c. 上昇型語聲調 (V) が、提示形 (citation form) では語頭に H が付加される。
- d. 下降型語聲調 (ɲ) が、提示形では語末に H が付加される。
- e. 多音節語の語末の/e/の脱落が自由に起こらない。

/b, d/はドム 1 ノン・ク方言ではそれぞれ [mb, nd]、ドム 2 では [b, d] である。シンブー祖語に遡る有聲閉鎖音はドム語では語頭以外にほとんど残されてゐないが (千田 2011)、形態的な組み合わせであつた鼻音 +/k/の音形から語中の/g/が発生してゐる。

/g/はドム 1 ノン・ク方言においては常に [ŋg] で實現されるのに對しドム 2 においては語頭で [g]、語頭以外で [ŋ] で實現する。ドム 2 では更に、兩脣音の後、あるいは/w/の前で任意に脱落する。以下にドム 2 方言の/g/の實現の例を示す。

- (3) a. /ɲgla/ (口) [gɲla]
- b. /ɲmolgwa/ (ゐる.3.SRD) [molɲwa] ~ [molwa]
- c. /Vmopge/ (ゐる.1NSG.IND) [moɲpɲleɪ] ~ [moɲpeɪ]

ドム語には語彙的・辨別的な語を單位とするピッチ・パターンがある。メロディーは高型 (Γ)、下降型 (ɲ)、上昇型 (V) が區別される、音素的な聲調 (トーン) である。ドム 1 ノン・クでは上昇型にさらに二種あり、第一音節のピッチが必ず低く實現するもの (A, ほとんどの

\*8 ドム 1 とドム 2 の相互理解は受動的多方言使用により促進されてゐる部分がありさうである。ドム語を母語としないドム語話者 (他地域からドムに嫁入りした女性など) の中には一方の方言を流暢に話すにも拘はらず他方言話者とドム語で完全な意思疎通ができないやうなケースが散見される。筆者自身も初めてのドム 2 訪問時は自分のドム語による發話が理解されてゐるのに相手のドム語による發話が理解できないことを何度も経験した。

語彙) と、第一音節のピッチが指定されてみないもの (B, 動詞未来形の一部のみ) がある\*9。ドム 2 では同様のメロディーがあるが、上昇型の二種の区別はあまり明確でない。上昇型 A は第一音節の低いピッチが任意で高くなり、(4) のような揺れを示す。特に提示形では通常第一音節の任意の高調 (H) 付與が見られる。

- (4) a. /ʋapane/ (アパネ草\*10) [aɭpaɭneɫ] ~ [aɽpaɭneɫ]  
 b. /ʋbonna/ (脛.1.POSS) [bonɭnaɫ] ~ [bonɽnaɫ]  
 c. /ʋapal/ (女) [aɭpaɫɫ] ~ [aɽpaɫɫ]

以上のやうに、上昇型 A の語頭の高調付與は、三音節以上の語、及び重音節を含む二音節語では任意に起こるが、それ以外の語 (短い語) では語頭の高調は付與されない。

- (5) a. /ʋpo/ (行け) [poɽɫ]  
 b. /ʋkom/ (ヤム芋) [komɫ]  
 c. /ʋkepa/ (薩摩芋) [keɭpaɫ]

ところで以上の事実とドム 1 の知識だけではつぎの語頭の高調付與を説明できない。

- (6) a. /ʋkaulaa/ (大黒柱) [kauɭlaaɫ] ~ [kauɽlaaɫ]  
 b. /ʋmuuna/ (背.1.POSS) [muɽnaɫ] ~ [muɽɽnaɫ]  
 c. /ʋmrgwa/ (口を嚙む.3.SRD) [mɽɽɽɽwaɫ] ~ [mɽɽɽɽwaɫ]  
 d. /ʋmm/ (肝臓.2.POSS) [mɽmɫ] ~ [mɽmɽɫ]

ドム 1 ノン・クでは高型の語の語末の以外で母音の長短の区別があるといふ強い證據は今のところない (Tida 2006)。ところが (6a, b) のやうな例から、少なくともドム 2 ではその環境以外でも母音の長短が音素的に区別されてゐると考へられる。次に、(6c) のやうに、共鳴音を音節主音にもつ音節は重音節としてはたはける。(6d) のやうに音節主音的共鳴音にさらに共鳴音が續く場合は、一見一音節でも高調付與が起こる。このやうな場合、/mɽ.n/ のやうに二音節語として認めるべきかもしれない\*11。

ドム 2 の上昇型 B は第一音節のピッチがほぼ必ず高い (7)。

- (7) a. /eɭʋale/ (私が作らうと) [eɽlaɭleɫ]

\*9 メロディーの符號は基本的に語の先頭に置く。上昇型 B のみ未来を表はす形態素の前に置く。

\*10 蘭の一種で黄色い纖維を腕環等様々な装飾に利用する。Bergmann (1966) のクマン語辭書項目「ambane」。

\*11 /mɽ.n/ のやうな音節構造を認めると、トーンの声實現の揺れは [mɽɽnɫ] ~ [mɽɽnɫ] のやうに表はすことができる。

b. /kol/ana/ (お前が汲みに) [koŋlaŋnaŋ]

以上、ドム 1 の體系 (語彙的な上昇 A/B) を基盤にして記述したが、ドム 2 特有の別の語彙的なパターンがある可能性も検討すべきかもしれない。

下降型の語の實現についてもドム 1 との違いが認められる。以下の通り、ドム 2 では語の長短を問はず任意に語末の音節に高調 (H) が付與される。(8) の變異のうち右側のものはドム 1 では見られない\*12。

- (8) a. /ŋi/ (この、その、あの) [i:ŋ] ~ [i:ŋH]  
b. /ŋdol/ (玉蜀黍) [dolŋ] ~ [dolŋH]  
c. /ŋaml/ (高地蝸の木\*13) [aŋmŋ] ~ [aŋmŋH]  
d. /ŋkomna/ (野菜) [komŋna] ~ [komŋnaH]

最後に、ドム 1 ノン・クでは多音節語の語末の/e/が任意に、しかし頻繁に脱落する。

- (9) a. /ŋkale/ (足) [kaŋle] ~ [kaŋ]  
b. /ŋmukale/ (竹の一種) [muŋkaŋle] ~ [muŋkaŋ]  
c. /ŋmaune/ (地面) [mauŋne] ~ [mauŋ]

ドム 2 では語末の/e/脱落は主に母音始まりの語が後續する際に見られる。しかし發話末ではほとんど起こらない。三人稱主語直説法の動詞が若干例外的に發話末でも/e/脱落を示す。本稿のテキストでは/e/脱落を起こして發音された場合、e を上付き<sup>e</sup>で表記してある。

### 3.2 文法形式と體系

ドム 2 は、以下のやうに文法的にもドム 1 ノン・クと異なる側面がある。

- (10) a. 動詞の二三人稱主語形は数による區別がなされない。  
b. 動詞の一人稱雙數主語形の使用が非常に稀である。  
c. 動詞の共有指示形などの接尾辭の形式が少々異なる。  
d. 動詞の同主語接續形-(r)e の強形-(r)ere が頻繁に用ゐられる。  
e. その他の形態音韻論的過程  
f. 一般的な場所化標識が=ŋa ではなく =ŋmle である。

\*12 ドム 2 では上昇型も下降型も HLH のメロディーで實現されえる。ある種の音形では一つの變異のみでトーンが決定できない。例へば (3c) の右の變異のみを示されても上昇型か下降型か分からない。

\*13 堅果を食べる蝸の木。眞つ赤な油脂の部分を利用する ŋkopa(red pandanus) に對する highland pandanus。

まづ、動詞の接尾辭で區別される人稱・數は、ドム 1 ノン・クでは一、二、三人稱と單、雙、複數の範疇が區別される。雙數と複數においては二人稱と三人稱が區別されないため七つの要素からなる體系をもつ。表 1 に直説法の接尾辭で人稱・數の體系を示した。ドム 1 ノン・クでは人間が主語である場合に動詞雙數形の使用がほとんど義務的であり、「複數」は動詞においては三人以上に對してしか用ゐられない範疇である。

ドム 2 では一、二、三人稱と單數・非單數の範疇が區別され、二人稱と三人稱においては數が區別されないため四つの要素からなる體系をもつ。また「我々二人」が主語の場合は一一人稱非單數を使つても雙數を使つてもよい。表 2 はドム 2 の直説法接尾辭である。

	單數	雙數	複數
一人稱	-ke	-pke	-pge
二人稱	-ge	-ipke	-igwe
三人稱	-gwe		

表 1 ドム 1 の動詞人稱・數接尾辭 (IND)

	單數	非單數 (任意の雙數)
一人稱	-ke	-pge (-plke)
二人稱		-ge
三人稱		-gwe

表 2 ドム 2 の動詞人稱・數接尾辭 (IND)

上の直説法などの場合には、異なる體系で同一の形式が少々異なる範疇にあてはめられて現れたものと言へる。

全面的にはないが形式自體が異なる文法接尾辭も存在する。以下の表 3、表 4 は動詞共有知識形の接尾辭の例である。

	單數	雙數	複數
一人稱	-krae	-pkrae	-pdae
二人稱	-dae	-ipkrae	-iwdae
三人稱	-wdae		

表 3 ドム 1 の動詞人稱・數接尾辭 (MK)

	單數	非單數 (任意の雙數)
一人稱	-kra	-pgna (-plkra)
二人稱		-gna
三人稱		-una

表 4 ドム 2 の動詞人稱・數接尾辭 (MK)

同主語接續形接尾辭-(r)e の強形-(r)ere は、ドム 1 ノン・クでは年配の話者が使つた例がこれまで數例確認できたのだが、ドム 2 では日常的に使はれてゐる。本稿末尾のテキストだけでも次のやうな例が確認できる。

- (11) a. 「u-rere 「來て」、s-rere 「打つて」、i-rere 「取つて」、p-rere 「行つて」  
 b. \mol-ere 「ゐて」、\el-ere 「作つて」、\pl-ere 「聞いて」  
 c. \kan-ere 「見て」

以上のやうにこの接尾辭は高型動詞語根には-rereの形で(11a)、その他の場合は-ereの形で(11b, c)付く。

その他の形態音韻論的過程も方言で若干異なる。まづ、語根が高型の動詞の命令形が、ドム1ノン・クでは下降型聲調を取る(12a)のに對し、ドム2では上昇型を取る(12b)。以下は「p-(行)と「ne-(食)の命令形である。

- (12) a.  $\backslash$ po 「行け」、 $\backslash$ no 「食べろ」  
b.  $\vee$ po 「行け」、 $\vee$ no 「食べろ」

高型動詞語根の一部は「d-(言)、「s-(打)など子音一つからなる。ドム1ではこのやうな語根に一人稱雙數、一人稱複數、三人稱單數の接尾辭が後續すると必ずu挿入が起こるが(13a)、ドム2では三人稱接尾辭がgwで現はれるときのみu挿入が起こり、兩唇音で現はれる形態素が後續する場合に母音uの挿入が起こらない(13b)。以下は兩方言における「d-(言)の同源活用形であり、u出沒を語幹側の交替と捉へて形態素境界を付した。

- (13) a.  $\backslash$ du-me (3SG.EM)  $\backslash$ du-gwe (3SG.IND)  $\backslash$ du-pne (1PL.EM)  $\backslash$ du-pge (1PL.IND)  
b.  $\backslash$ d-me (3.EM)  $\backslash$ du-gwe (3.IND)  $\backslash$ d-pne (1NSG.EM)  $\backslash$ d-pge (1NSG.IND)

最後に、ドム1ノン・クでは「ila「の中」に由來する= $\backslash$ laが場所化標識「のところ」としてはたらくが、ドム2では「mle「の上」と同一の音形をもつ= $\backslash$ mleが場所化標識である。

### 3.3 語彙

語彙的な違ひは瑣末なことを含めれば非常に多い。また語彙の意味自體が一對一の對應をしてみない場合も含まれる。例へばドム1ノン・クでは名詞としても強調語としてもはたらく $\backslash$ kawan「本當のこと、本當に」と強調語の役割しかない $\backslash$ wone「とても、本當に」が區別されるがドム2では兩方の意味領域を $\backslash$ oneで表はす。一方、ドム1ノン・クでは網鞆を「作る」といふのに $\backslash$ el-「作る」といふ動詞を使ふしかないが、ドム2では $\backslash$ el-のほか $\vee$ war-「(網鞆を)作る」といふ作成動詞がある。

同じ意味の語彙でも使用頻度が異なつてくる。例へばドム語には兄弟姉妹語彙として、男女の區別をする語彙(14a)と長幼を區別する語彙(14b)があるが、ドム1ノン・クでは(14b)の使用は稀であるのに對し、ドム2ではしばしば耳にする。

- (14) a.  $\vee$ al- 「兄、弟」、 $\vee$ aupal- 「姉、妹」  
b. 「ap- 「兄、姉」、「kep- 「弟、妹」

語形變化の一部が異なる場合も多い。動詞 *ʋkan-*「見る」と *ʋwan-*「回る、歩く」の語幹は、ドム 1 ノン・ク方言では一人稱主語標識、二三人稱雙數標識と共起する際にそれぞれ *ʋkar-*、*ʋwar-*といふ形式に交替する。一方でドム 2 では常に一定の語幹を保ち、異形態 *ʋkar-*、*ʋwar-*を持たない。例へばドム 2 の *kan-ʋa-l-a*(見-FUT-1SG-PERM)「見よう」はドム 1 ノン・ク方言では *kar-ʋa-l-a* で現れる。

多くの語彙がドム 1 ノン・ク、ドム 2 に共通の音形をもつが、さうでないものもある。音形が異なる場合、一、二の音の違いにとどまるものもあれば全く異なる語根からなる語彙もある。表 5 の例を以下にいくつか示す。

	ドム 1 ノン・ク	ドム 2
根本	ʌmapne	ʌmamne
羊齒の一種	ʋtapn	ʋtamne
我々 (EXCL)	ʋno	ʋne
我々 (INCL)	ʋnone	ʋnene
昨日	ʋgran	ʋgraune
(雨が) やむ	ʋs ʋtogwe	ʋtorgwe
匂ひ	ʋmnane	ʋkumne
齒	ʋsik-i	ʋki-m
蝶	ʋkuim ʋkaim	ʋur ʋkopa
異なる	ʋmore	ʋpere
遠い	ʋekl	ʋpai
強い	ʋgl ʋdugwe	ʋnma ʋogwe

表 5 ドム内方言差 (語彙)

### 3.4 まとめ

以上に見たやうに、ドム 1 ノン・ク方言とドム 2 方言は音韻・音聲、文法、語彙の面で方言差を示す。筆者の手にあるまとまつた資料にはドム 1 の非ノン・ク方言やエラ方言が含まれてゐない。ここにみた違いが全ての方言においてどのやうに現はれるか、今後の調査にまたなければならぬ。断片的な資料から、ドム 1 ノン・ク方言のみに見られる特徴はクマン系諸方言からの影響、ドム 2 のみに見られる特徴はシネシネ地区諸言語からの影響によるものが大きいと予測する。

## 4 テキスト

### 4.1 お化けに子供が吞まれる

Told by Kum Kora

Recorded on 26 September 2012

- (15) 「*na* *ʌgɫmai*=「*kene* *ʌkaman* *ʌd-ra-l-e*            *ʌel+ʌlo*  
私 (人名)=と 話 言-FUT-1SG-IMM 作.1SG+EXPL  
「ギルマイと一緒に民話を話します」
- (16) *ʌene ʌene*  
さて さて  
「さてさて」
- (17) *ʌgal ʌgam*\*14 *ʌsu*=「*ta*=*ʌo*  
子供 子供 二=或=PF  
「二人の子供が、」
- (18) *ʌne-m ʌma-m ʌkonan ʌgol el-ʌa-l-e*            「*p-re ʌene ʌkepa ʌke-gwa*  
父-3.POSS 母-3.POSS 仕事 共同 作-FUT-1SG-IMM 行-SS さて 薩摩芋 炊-3.SRD  
「*ʌne-re ʌmol-gwa*  
食-SS 居-3.SRD  
「両親が共同耕作をしに出掛けて、さて、薩摩芋を炊いたのを食べてみたのだけれど」
- (19) *ʌene ʌepal ʌkepa ʌne-na-gwa ʌno mol-ʌa-m+ʌio ʌnl kol-ʌa-n-a*  
さて 人 薩摩芋 食-FUT-3.SRD 喉.3.POSS 詰-FUT-3+EXPL 水 汲-FUT-2-PERM  
「*ʌp-o ʌdu-gwe*  
行-IMP 言-3.IND  
「さて、(親が子供に) 薩摩芋を食べたら喉につまる人もあらう、と、水を汲みに行きなさいと言ひました。」

---

\*14 *ʌgam* は今のところ唯一の例である。説話にしばしば登場するドム語の *ʌgau-m*(孫-3.POSS) に由来するものかもしれない。近隣のなんらかのシンブー語(ケパイ語やゴリン語に見られる *gan* 「子」) と混交した形式である可能性もある。

- (20) *ʋgal ʋsu=ɽrae ɽere<sup>\*15</sup> ɽnule=ɽrae ʌo-una*  
 子 二=MK 去 川=MK 行-3.MK  
 「二人の子供が川に行つたところ」
- (21) *ʌaipa ɽgukl ʌgalne ʌnl ʋsuna ʌile=ɽrae (ʋ)pai ʌmol-ere ɽen ʋnale ʌi-ra-l-e*  
 (化物名) 水中 水平.あの=MK 臥.INF 居-SS 汝何 取-FUT-1SG-IMM  
*ʌu-n-e ʌdu-gwe*  
 来-2-npint 言-3.IND  
 「アイパ・グクル・ガルネ(葉野菜・穴・意味不明)が川の真ん中にをり、お前たちは何を取りに来たんだと言ひました。」
- (22) *ɽna ʋnape ɽna ʋmna=ʌo ʌkonan ʌgol ʌel-gwa*  
 我 父.1SG.POSS 我 母.1SG.POSS=PF 仕事 共同 作-3.SRD  
 「僕達の両親が共同耕作をしてみるのだけれど」
- (23) *ʌepal ʋkepa ʌne-na-gwa ʌno mol-ʋa-m+ɽia ʌnl kol-ʋa-n-a*  
 人 薩摩芋 食-FUT-3.SRD 喉.3.POSS 詰-FUT-3+EXPL 水 汲-FUT-2-PERM  
*ʋp-o ʌdu-gwe<sup>\*16</sup>*  
 行-IMP 言-3.IND  
 「薩摩芋を食べたら喉に詰まる人もあらうから、水を汲みに行けと言ひました。」
- (24) *ɽna ʌnl kol-ʋa-l=ɽd ʌw-i=ʌua ʌdu-gwe*  
 我 水 汲-FUT-1SG.EM=Q 来-1SG=CF 言-3.IND  
 「(それで)僕は水を汲みに来たんだと言ひました。」
- (25) *ʋena ɽta ʋime<sup>\*17</sup> ʌnl ʌkol mol-ʋa-m+ʌio*  
 さて 別 下方.その 水 汲.INF 居-FUT-3+EXPL  
 「それならその一人が水を汲めばよろしい。」

<sup>\*15</sup> ɽere は「p-(行)か「u-(来)の前に任意に現はれる不變化詞でそれ自體はほとんど意味をもたない。目的地、到着地はɽereの後に置かれる。

<sup>\*16</sup> 引用文の途中であるため ʌdugwe ではなく ʌdum=ɽia あるいは ʌdum=ʌua などの表現を使ふのが普通。

<sup>\*17</sup> ドム語には中立的な指示詞 Ni~ɽi 「この、その、あの」を含め 12 の指示詞がある。多くの指示詞は話し手からの高低を三段階、すなはち上方、水平、下方に區別する。Ni~ɽi 以外の指示詞は名詞を修飾できるほか場所名詞「ここ、そこ」としてはたらく。

- (26) *Vena*  $\Gamma en$   $\Gamma ta$   $\Gamma er^e$   $\lambda ya$   $\lambda u-ge$   $\Gamma na$   
 さて 汝 別 去 この 來-2.DS 我  
 —  $\lambda nman$   $\lambda bl-n=\Gamma mle$   $\lambda ipe^{*18}$   $\lambda pa-m+\Gamma ia^{*19}$  —  
 虱 頭-2.POSS=LOC 上方. あの 臥-3+EXPL  
 $\lambda nman$   $\lambda i$   $\lambda kan-e$   $\lambda s-ra-l=\lambda ua$   $\lambda du-gwe$   
 虱 DEM 見-SS 打-FUT-1SG=CF 言-3.IND  
 「お前たちのもう一人の方はこちらに來たら、俺が—虱がお前の頭にゐるから—その虱を探してつぶしてやらうと言いました。」

- (27)  $\lambda gal=\Gamma rac$   $\lambda one$   $\lambda d-m^e=\Gamma d^{*20}$   $\Gamma u$   $\lambda mala$   $\lambda u-una^{*21}$   $\lambda aipa$   $\Gamma gukl$   $\lambda galne=\Gamma ae$   
 子=MK 眞 言-3=Q 來.INF 近 來.3.MK (化物名)=MK  
 $\Gamma ur^{*22}$   $\Gamma s$   $\lambda kor-gwa$   
 吸 (VN) LV.INF COMPL-3.SRD  
 「子供は本當のことと思ひ近づいたところ、アイパ・グルル・ガルネときたらシュッと吸ひ込んでしまつて」

- (28)  $\Gamma ere$   $\lambda de-m$   $\lambda suna$   $\Gamma p$   $\lambda kor-gwa$   
 去 腸-3.POSS 中 行.INF COMPL-3.SRD  
 「(子供は) お腹の中に入つてしまつたので」

- (29)  $\lambda gal$   $\Gamma ta=\Gamma rac$   $\lambda kai$   $\lambda el-e$   $\lambda el-e$   $\Gamma p$   $(\lambda ne-m$   $\lambda ma-m$   $\lambda mol-gwa$   $\lambda ai$   
 子 別=MK 泣 (VN) LV.SS LV.SS 行.INF 父-3.POSS 母-3.POSS 居-3.SRD 所  
 $\Gamma d$   $\lambda to-gwa$   
 言.INF 與-3.SRD  
 「もう一人の子供は泣きながら兩親のゐるところに行つて話をしたところ」

\*18 ドム語の指示詞では發話參與者からの距離による三段階の區別、すなはち遠稱、中稱、近稱の區別がある。聞き手の身體部位に言及する名詞句を修飾する指示詞としては遠稱 *Nipe* ではなく中稱 *Vipe* が使はれることが多いが、遠稱の系列は發話參與者からの距離に関りない距離中立用法も見られる。ここでは遠稱の距離中立用法か。

\*19 説明法の用法の一つは挿入句を作るものである。この文では異主語接續の  $\lambda uge$  「お前が來たら」は  $\lambda sral=\lambda ua$  「俺が殺す」を述語とする節との接続を示してをり、この挿入句の説明法の述語とは關係してゐない。

\*20 引用標識を伴ふ節は「〜と」と譯せるほか「〜と思ひ」と譯せる場合がある。

\*21 ここから化け物側の視點で直示動詞「p-(行)」と「u-(來)」の使ひ分けがなされる。

\*22 述語的な意味をもつた名詞を動名詞と呼ぶことにする。動名詞を述語として使ふ場合、語彙的に決まつた何らかの輕動詞が後續する。輕動詞は全て單獨でも動詞としてはたらくことのある語彙だが、動名詞+輕動詞の構文においてはほとんど全體の意味に寄與しないことも多い。

- (30) *(/ne-m*      */ma-m=rae*      *ru-rere*      *vena laipa* *gukl galne=ra*      *no*<sup>\*23</sup>  
 父-3.POSS      母-3.POSS=MK      来-SS      さて (化物名)=MK      首.3.POSS  
*kupa* *s-rere* *d-e-m*      *suna=rae* *pul* *s*      *kan-una* *gal=rae* *pa-gwe*  
 棒 打-SS 腸-3.POSS 中=MK      刃 打.INF 見-3.MK 子=MK 臥-3.IND  
 「両親は行つて、さてアイパ・グクル・ガルネの首を棒で打ちお腹の中を刃物で切つて見たところ子供がみました。」

- (31) {*apal* *ay-e*      *ni mu*}  
 女 (CL) 祖母-1SG.POSS (歌詞)  
 (お婆ちゃん、ヌル、ム..)

- (32) *apal*      *ay-e*      *kola*<sup>\*24</sup>      *mle* *pl-e*      *na* *s-n-o*  
 女 (CL) 祖母-1SG.POSS 木の一種 實 思-SS 我 打-2-PINT  
*ni* *mumu* *kan* *mumu*  
 (歌詞)  
 「お婆ちゃん、コラの實のせみで僕をぶつの? ヌル、ムム、カン、ムム」

- (33) *apal*      *ay-e*      *kola*      *mle* *pl-e*      *na* *s-n-o*  
 女 (CL) 祖母-1SG.POSS 木の一種 實 思-SS 我 打-2-PINT  
*ni* *mumu* *kan* *mumu*  
 (歌詞)  
 「お婆ちゃん、コラの實のせみで僕をぶつの? ヌル、ムム、カン、ムム」

- (34) *d* *el*      *d-re*      *gal=rae* *i*      *er-gwa*      *kui* *mol*      *pa-m=uo*  
 Q 斯様 言-SS 子=MK 取.INF 出-3.SRD 生 居.INF IPFV-3=CF  
 「とかう歌つて子供を取り出したらまだ生きてみましたとき。」

- (35) *kupa*      *laipa*      *bol* *tol* *tal*  
 眞菰の一種 葉野菜の一種 (擬音か)  
 「いつもの野菜のぱつちぱち (おしまひ)」

<sup>\*23</sup> *no* (ドム 1 ノン・ク: *no*) は首、あるいは喉を指す。

<sup>\*24</sup> *kola* は *Ficus copiosa* Steud.。若葉が食用で、實も食べる。

## 4.2 イララ

Told by Kum Kora

Recorded on 26 September 2012

- (36) *Vena Vapal Vay-e=ra Vena kan Vpuul<sup>e</sup> ri r-p-rere Vkr=ra*  
 さて 女 (CL) 祖母-1SG.POSS=或 さて 蔓 採.INF 取.INF 行-SS (擬態)=ADV  
*Vpuul-e lamol-gwa*  
 解-INF 居-3.SRD  
 「さてあるお婆ちやんが、ええ、紐を擦るための蔓を採つて来てスーと裂いてみたら、」

- (37) *Vpuul<sup>e</sup> lamol-gwa lai=ra=ra are Vyul Vye-re*  
 解.INF 居-3.SRD 所=MK=PF 太陽 日光浴 (VN) LV-SS  
 — *are kui Vmoo lu-m+ra* —  
 太陽 新 昇.INF 来-3+EXPL  
*are Vyul Vye-re apl lamol-gwa lai=rae*  
 太陽 日光浴 (VN) LV-SS 感.INF 居-3.SRD 所=MK  
 「スーと裂いてみたのだが、このお婆ちやんは日なたぼつこをして— 日が出てきたところだつたものだから — 日なたぼつこをして日差しを浴びてみたところ」

- (38) *lirala=rae ru-re Vbl-e Vmaa Vbl-e Vmaa lel-m+ra*  
 鳥の一種=MK 来-SS 頭-3.POSS 抜.INF 頭-3.POSS 抜.INF 作-3+EXPL  
 「イララ (小さな鳥) が来て髪の毛を引き抜き引き抜きするものだから」

- (39) *kan rula rupa=rae lsu-una*  
 蔓 小枝 棒=MK 打-3.MK  
 「(お婆ちやんは) 蔓の小枝で打つたところ」

- (40) *lirala=rae gol Vpa-m+ra*  
 鳥の一種=MK 死.INF 臥-3+EXPL  
 「イララは死んでしまひました。」

- (41) ʔi ʔp ʌdo-gwal ʌime=ʔrae ʌgal-e ʋai-m=ʔrae  
 取.INF 行.INF 燃-3.LOC 下方.あの=MK 焼-SS 祖母-3.POSS=MK  
 ʔna ʋnene ʌsi-ka ʋpa-m+ʌio ʋbl-e ʌne-ra-l+ʔla  
 我 自 打-1SG.SRD 臥-3+EXPL 頭-3.POSS 食-FUT-1+EXPL  
 「それを火のところに持つて行つて焼いて、お婆ちやんは「私が獲つたものだ、私が  
 頭を食べよう。」
- (42) ʋgau-m=ʔrae ʔkal-e ʋn-o ʌdu-gwi ʌkore  
 孫-3.POSS 足-3.POSS 食-IMP 言-3.DEM ところが  
 「孫は足を食べなさい」と言ふのに」
- (43) ʋgal=ʔrae ʔna ʔmuru\*25 ʌne-ra-l=ʌua ʌdu-gwa  
 子=MK 我 全 食-FUT-1=CF 言-3.SRD  
 「子供は「ぼくが一人で食べるんだ」と言ふので」
- (44) ʋgal=ʔrae ʔs ʋipe ʌer-una  
 子=MK 打.INF 上方.その 移動-3.MK  
 「(お婆ちやんは)子供を叩きはらひ上げたところ」
- (45) ʌbol-e ʋapal ʋai-m=ʔrae ʌsu-gwa ʌbol-e ʋgal ʋgau-m=ʔrae  
 被-SS 女(CL) 祖母-3.POSS=MK 打-3.SRD 被-SS 子(CL) 孫-3.POSS=MK  
 ʌkai ʌel-gw<sup>e</sup>  
 泣(VN) 作-3.IND  
 「打たれて、お婆ちやんに叩かれて子供の孫は泣きました。」
- (46) ʋkan-ere ʋene {ʋai-m=ʔrae ʔd} ʋgal ʋgau-m=ʔrae ʌkai ʌel-ere  
 見-SS さて 祖母-3.POSS=MK 言.INF 子(CL) 孫-3.POSS=MK 泣(VN) 作-SS  
 ʋai-m=ʔrae ʋel ʔd ʌto-gwe  
 祖母-3.POSS=MK 斯様 言.INF 與-3.IND  
 「それを見て、さて(お婆ちやんが言ひ)子供の孫は泣いてお婆ちやんにかう言ひま  
 した。」

\*25 ʔmuru は主語が「一人で」といふ意味の時と目的語を「まるごと」といふ意味の時がある。

(47) *ʎyopa*<sup>\*26</sup> *ʌmo-ke* *ʌdala* *ʌna-l-o* *parwena parwena wena*

木の一種 居-1SG.IND 木の一種 行.FUT-1SG-PINT (歌詞)

*ʎyopa* *ʌmo-ke* *ʌdala* *ʌna-l-o* *parwena parwena wena*

木の一種 居-1SG.IND 木の一種 行.FUT-1SG-PINT (歌詞)

*ʌdu-gwe*

言-3.IND

「ヨパの木にゐます、ダラの木に行きませうか、パルウエナ、パルウエナ、ウエナ。

ヨパの木にゐます、ダラの木に行きませうか、パルウエナ、パルウエナ、ウエナ。」

と言ひました」

(48) *ʎel* *ʌdu-gwa* *ʎape* *ʎyau<sup>c</sup>* *ʎay-e* *ʎkup ʎkaman ʌdu-gwa*

ス様 言-3.SRD 父.1SG.POSS 祖父.1SG.POSS 祖母-1SG.POSS お伽噺 言-3.SRD

*ʎna ʎelma ʎpore* *ʎel-e* *ʌd-ke*

我 今 話 (VN) LV-SS 言-1SG.IND

「こんな風に父さん、爺さん婆さんがお伽話をしたのを、私がここにお話ししました」

(49) *ʎkupa* *ʎaipa* *ʎbo ʎto ʎtal*

真菰の一種 葉野菜の一種 (擬音か)

「いつもの野菜のぼつちぱち (おしまひ)」

### 4.3 ドム誕生

Told by More Apeke

Recorded on 26 September 2012

(50) *ʎyale ʎya*<sup>\*27</sup> *ʎyal ʎbl ʎipe* *ʎta ʎepal ʎel* *ʎer-gwa* *ʎi=ʎwe*

男 TS 男 大 上方.あの 或 人 作.INF 出-3.SRD DEM=PF

「男をあれして... 神様があるとき一人の人間を創り出したのだけれど、」

(51) *ʎyal ʎi* *ʎkupe ʎgla* *ʎmr-gwa=ʎwe ʎdu-gwa ʎel* *ʎer-gwa ʎi*

男 DEM 夢 口.3.POSS 嚙-3.SRD=PF 言-3.SRD 作.INF 出-3.SRD DEM

「クペ・グラ・ムルングワ (夢・口・嚙み) といふ男を創り出したのだけれど、」

<sup>\*26</sup> ここから歌つてをり録音ではトーンははつきり分らない部分が多い。本来のトーンを付した。

<sup>\*27</sup> 適切な言語形式がすぐに思ひ付かなかつた場合に假に言ふことば。必ずなんらかの表現を見付けて補足説明する。

- (52) *ler-gwa* *ʔi* *ʔp* *ʔp* *ʔdle* *ʔkople* *ʔila* *ʔipe* *ʔpai* *ʔmol-gwe*  
 出-3.SRD DEM 行.INF 行.INF 石の一種 石 内 上方. あの 住.INF 居-3.IND  
 「(その男は、)奥の方、ドゥレ・コプレに住んでみました。」
- (53) *ʔdle* *ʔkople* *ʔone* *ʔipe* *ʔpai* *ʔmol-gwa* *ʔoo* *ʔi* *ʔel* *ʔs*  
 石の一種 石 真 上方. あの 住.INF 居-3.SRD 手.3.POSS DEM 斯様 打.INF  
*ʔel* *ʔel* *ʔs#ʔbol* *ʔkor-gwi*  
 斯様 作.INF 閉塞.INF COMPL-3.SRD  
 「まさにドゥレ・コプレに住んでみたのだけれど、手がこんな風になつて、こんな風  
 にくつ付いてしまつてゐて」
- (54) *ʔgla* *ʔi* *ʔel* *ʔel* *ʔs* *ʔmr* *ʔkor-m+ʔio*  
 口.3.POSS DEM 斯様 作.INF 打.INF 嚙.INF COMPL-3+EXPL  
 「口はこんな風になつてつむつてしまつてゐるわ」
- (55) *ʔoml<sup>e</sup>* *ʔi* *ʔel* *ʔel* *ʔgi* *ʔd* *ʔkor-m+ʔio*  
 目.3.POSS DEM 斯様 作.INF 堅 LV COMPL-3+EXPL  
 「目はこんな風になつて閉ぢてしまつてゐるわで」
- (56) *ʔoo* *ʔkal<sup>e</sup>* *ʔi* *ʔmuru* *ʔs#ʔi* *ʔkor-gwe*  
 手.3.POSS 足.3.POSS DEM 全 癒着.INF COMPL-3.IND  
 「手足がみな引つ付いてしまつてゐました。」
- (57) *ʔme* *ʔmuru* *ʔgal=ʔmere* *ʔmol* *ʔkor-gw<sup>e</sup>*  
 CRAN 全 子=如 居.INF COMPL-3.IND  
 「全くメ・ムル童子\*28のやうな様子でした。」
- (58) 千田: *ʔme* *ʔmuru* *ʔgal*  
 CRAN 全 子  
 「メ・ムル童子。」
- (59) *ʔme* *ʔmuru* *ʔgal=ʔmere* *ʔmol-gw<sup>e</sup>*  
 CRAN 全 子 居-3IND  
 「メ・ムル童子のやうでした。」

\*28 メ・ムル童子はのつぺら坊のだるまのやうな怪物。

- (60)  $\lambda\text{mol-m}=\text{ba } \lambda\text{kore} \quad \lambda\text{yal } \text{li}=\text{rae} \quad \lambda\text{dogwa } \text{ino } \lambda\text{el} \quad \lambda\text{el} \quad \lambda\text{el-gwa } \text{gi}$   
 居-3=だが ところが 男 DEM.MK 火 (CL) 煙 作.INF 作.INF 作-3.SRD DEM  
 $\lambda\text{dika} \quad \text{gi } \text{vsu}=\text{kle}=\text{ta } \text{kan-m-e}^{*29} \quad \lambda\text{du-gwe}$   
 (部族名) 娘 二=だけ=或 見-3-EM 言-3.IND  
 「ところが、その男が火を焚いて煙の立つてゐるのを二人のディカ族の娘が見付けた  
 のだそうです。」
- (61)  $\lambda\text{dogwa } \text{ino}=\text{ta } \lambda\text{mala } \text{ilan } \lambda\text{ipe} \quad \lambda\text{kople } \lambda\text{mamne } \text{ila } \lambda\text{ipe} \quad \lambda\text{dogwa}$   
 火 (CL) 煙=或 近 内 上方.あの 石 根元 内 上方.あの 火 (CL)  
 $\text{ino}=\text{ta } \lambda\text{el} \quad \lambda\text{el} \quad \lambda\text{el-m}+\lambda\text{io}$   
 煙=或 作.INF 作.INF 作-3+EXPL  
 「煙がすぐあの奥に、岩根の奥に煙が立つてゐるよ。」
- (62)  $\text{na } \text{kan-}\text{a-l-a}=\text{o} \quad \text{d-re } \text{gi } \text{vsu } \text{gi}=\text{rae} \quad \lambda\text{o-gwa} \quad \lambda\text{o-gwa}$   
 我 見-FUT-1SG-PERM=PF 言-SS 娘 二 DEM=MK 行-3.SRD 行-3.SRD  
 「見に行かう」と言つて二人の娘はどンドン行つたところ」
- (63)  $\text{p} \quad \text{p} \quad \lambda\text{ipe} \quad \text{kan-gwa } \text{gi}=\text{rae} \quad \lambda\text{yal } \text{li}=\text{rae} \quad \lambda\text{mol-m-e } \lambda\text{du-gw}^e$   
 行.INF 行.INF 上方.あの 見-3SRD DEM=MK 男 DEM=MK 居-3-EM 言-3.IND  
 「しばらく行つて見たところその男がみたと言ひます。」
- (64)  $\lambda\text{mol-m}+\text{gia } \text{gi } \text{vsu } \text{li}=\text{rae} \quad \text{kan-ere } \text{aya } \lambda\text{dogwa } \text{ino}=\text{ta } \lambda\text{el} \quad \lambda\text{el}$   
 居-3+EXPL 娘 二 DEM=MK 見-SS わあ 火 (CL) 煙=或 作.INF 作.INF  
 $\lambda\text{el-una } \text{en } \lambda\text{e-ga} \quad \lambda\text{epal } \lambda\text{mo-n}+\lambda\text{io}=\text{d } \text{kan-m-e } \lambda\text{du-gw}^e$   
 作-3.MK 汝 作-2SRD 人 居-2+EXPL=Q 見-3-EM 言-3.IND  
 「そこで二人の娘はそれを見て、どうも煙が立つと思つてみたらあなたがした人なん  
 だねえと思つたさうです。」
- (65)  $\text{kan-gwa } \text{li}=\text{rae}=\text{we } \text{ena } \text{di} \quad \text{pul}$   
 見-3.SRD DEM=MK=PF さて 斧 (CL) 刃  
 「さうして、さて、竹ナイフ」

\*29 表出法動詞に「d-「言」の三人稱主語形が後續すると傳聞表現 (誰が言つたのかを問題にせずに傳へ聞いた事実であることを表はす)として使へる。

- (66) —  $\lambda naipe = \lambda ya$   $\backslash kal$   $\lambda i$   $\lambda elma$   $\lambda u-m + \Gamma ia$   $\lambda elesia$   $\lambda i$   
ナイフ=や 物 DEM 今 来-3+EXPL 剃刀 DEM  
 $\lambda elma$   $\lambda el$   $\backslash yo-m = \Gamma ia$  —  
今 作.INF 有-3+EXPL  
「— 金属のナイフみたいなものは最近買ったもので、剃刀だのが今は作られるのだ  
けれど—」
- (67)  $\lambda komne$   $\lambda i$   $\Gamma mukale$   $\backslash ku-pga$   $\lambda mala$   $\lambda du-gwa$   $\Gamma yale$   $\lambda i = \Gamma we$   
先 DEM 竹の一種 植-1NSG.SRD 近 存-3.SRD 水平.あの DEM=PF  
 $\Gamma mukale$   $\lambda i = \Gamma rae$   $\backslash au$   $\backslash dna$   $\Gamma d-re$   $\Gamma i-rere$   
竹の一種 DEM=MK 握.INF 裂(VN) LV-SS 取-SS  
「昔だからすぐ外にあるうちのあの竹だよ、竹を裂いて取つて来て」
- (68)  $\backslash ene$   $\backslash o$   $\lambda i = \Gamma rae$   $\backslash pul$   $\lambda bol$   $\lambda bol$   $\lambda bol$   $\lambda bol$   $\backslash ye$   $\lambda kor-e$   
さて 手.3.POSS DEM=MK 刃 切.INF 切.INF 切.INF 切.INF 有.INF COMPL-SS  
「それで切り込みを入れて手を作り」
- (69)  $\Gamma ka^e$   $\lambda i = \Gamma rae$   $\lambda bol$   $\lambda bol$   $\lambda bol$   $\lambda bol$   $\lambda kor-e$   
足.3.POSS DEM=MK 切.INF 切.INF 切.INF 切.INF COMPL-SS  
「切り込みを入れて足を作り」
- (70)  $\backslash omi^e$   $\lambda i = \Gamma rae$   $\lambda bol$   $\Gamma ara$   $\Gamma d$   $\lambda kor-e$   
目.3.POSS DEM=MK 切.INF 毀(VN) LV.INF COMPL-SS  
「目を切り開けて」
- (71)  $\lambda gla$   $\Gamma i = \Gamma rae$   $\lambda bol$   $\Gamma ara$   $\Gamma d$   $\lambda kor-e$   $\lambda el-gwa$   
口.3.POSS DEM=MK 切.INF 毀(VN) LV.INF COMPL-SS 作-3.SRD  
 $\Gamma u^{*30}$   $\lambda epal$   $\lambda o-m^e$   $\lambda du-gwe$   
来.INF 人 行-3.EM 言-3.IND  
「口を切り開けて、さうしたら人間になつたと言ひます。」
- (72)  $\Gamma u$   $\lambda epal$   $\Gamma p$   $\lambda kor-m + \Gamma ia$   $\Gamma gi$   $\backslash su = \Gamma rae$   $\backslash kan-ere = \Gamma we$   
来.INF 人 行.INF COMPL-3+EXPL 娘 二=MK 見-SS=PF

\*30  $\Gamma u$  X  $\Gamma p$ - $(来.INF X 行-)$ は「Xになる」を表はす構文。

「完全に人間になつたので、二人の娘はそれを見て」

- (73)  $\Gamma na \ \backslash yal \ \backslash su = \Gamma rae = \Gamma ta \ \backslash u - pl - kra \ \Gamma u - re \ \backslash kal \ \Gamma ta \ \backslash el \ \backslash el - pl - kra \ \backslash te^{*32} = \Gamma ra$   
 我 男<sup>\*31</sup> 二=MK=或 来-1DU-MK 来-SS 事 一作.INF 作-1DU-MK DEM=MK  
 $\Gamma u \ \backslash nepal \ \backslash o - m - e \ \Gamma d - re \ \Gamma gi \ \backslash su = \Gamma rae \ \backslash wai \ \backslash pl - m - e \ \backslash du - gwe$   
 来.INF 人 行-3-EM 言-SS 娘 二=MK 好 感-3-EM 言-3.IND  
 「私たちここへ来て一仕事したらこれが人間になつたわ」と言つて喜んださうです。」

- (74)  $\backslash wai \ \backslash pl - m + \Gamma ia \ \backslash yal = \Gamma rae = \Gamma kene \ \backslash pa - m \ \backslash du - gwe$   
 好 感-3+EXPL 男=MK=と 臥-3.EM 言-3.IND  
 「そこでその男と一晩を共にしたと言ひます。」

- (75)  $\backslash pa - m + \Gamma ia \ \backslash kui \# \backslash mol = \Gamma ra = \Gamma we \ \Gamma bo \ \backslash ba \ \backslash yal - gwa \ \Gamma i = \Gamma rae \ \backslash bal \ \backslash to - m - e$   
 臥-3+EXPL 明日=MK=PF 砂糖黍 赤 植-3.SRD DEM=MK 刈.INF 與-3-EM  
 $\backslash du - gwe$   
 言-3.IND  
 「そしてその次の日、(男は娘達に)自分の育てた赤砂糖黍を刈つてあげたさうです。」

- (76)  $\backslash bal \ \backslash to - m + \Gamma ia \ \backslash no - m + \Gamma ia \ \backslash yal \ \backslash i = \Gamma rae \ \backslash el \ \Gamma d \ \backslash to - m - e \ \backslash du - gwe$   
 刈.INF 與-3+EXPL 食-3+EXPL 男 DEM=MK 斯様 言.INF 與-3-EM 言-3.IND  
 「それを娘がしやぶると男はかう言つたさうです。」

- (77)  $\Gamma bo \ \backslash bal \ \Gamma en \ \backslash te - ka \ \backslash i = \backslash we \ \Gamma ne - re \ \Gamma bo \ \backslash gapl^e \ \backslash i \ \backslash kol \ \backslash bl \ \backslash i$   
 砂糖黍 赤 汝 與-1.SRD DEM=PF 食-SS 砂糖黍 皮 DEM 道 大 DEM  
 $\backslash er - e \ \backslash na - ga \ \backslash na - ga \ \backslash na - ga$   
 放-SS 行.FUT-2.SRD 行.FUT-2.SRD 行.FUT-2.SRD  
 「あなたにあげたその砂糖黍はしやぶつて皮を道に捨てながらずつと行つて」

- (78)  $\Gamma p \ \Gamma p \ \backslash ike \ (\backslash)ke \ \backslash pai - gal^{*33} \ \backslash ipe \ \backslash na - gna = \Gamma we \ \Gamma na \ \Gamma bo \ \backslash gapl^e$   
 行.INF 行.INF 家 建.INF 住-2.LOC 上方.あの 行.FUT-2.MK=PF 我 砂糖黍 皮

<sup>\*31</sup> 「私たち二人」を表はす  $\Gamma na \ \backslash yal \ \backslash su$ 、 $\Gamma ne \ \backslash yal \ \backslash su$  や「私たち(三人以上)」を表はす  $\Gamma ne \ \backslash yal = \Gamma kane$  などの句においては  $\backslash yal$  「男」が使はれてゐるが、男女に拘はらず「我々」の意味を表はす。

<sup>\*32</sup>  $\backslash te \sim \Gamma te$  は  $\backslash i \sim \Gamma i$  と同様の指示詞だが「まさにこれ」といふニュアンスがあり共有知識標識と共起例が多い。

<sup>\*33</sup>  $(\backslash)ke \ \backslash pai -$  は「住む」を表す熟語。「～の家」といふとき「～が住む家」を表はす主要部内在型関係節を使ふことが多い。

*li*    *ɽdule*    *ɽbol*    *ɽu-ra-ka*            *ɽu-ra-ka*            *ɽu-ra-ka*  
 DEM 従 (VN) LV.INF 来-FUT-1SG.SRD 来-FUT-1SG.SRD 来-FUT-1SG.SRD  
 「あなたが住んでゐる家に行つたら俺はその砂糖黍の皮にずつとついて行き」

(79) *ɽike* (*ɽke*)    *ɽpai-gal=ɽrae*    *ɽu-ra-l=ɽua*            *ɽd-m-e*    *ɽdu-gw<sup>e</sup>*  
 家 建.INF 住-2.LOC=MK 来-FUT-1SG=CF 言-3-EM 言-3.IND  
 「あなたの家まで行かう」と言つたさうです。」

(80) *ɽd-m+ɽia*    *ɽgi* *ɽsu=ɽrae*    *ɽkol*    *ɽbl* *ɽi=ɽrae*    *ɽbo*    *ɽgapl<sup>e</sup>* *ɽi=ɽrae*    *ɽne-re*  
 言-3+EXPL 娘 二=MK 道 大 DEM=MK 砂糖黍皮 DEM=MK 食-SS  
*ɽo-m+ɽia*    *ɽo-m+ɽia*    *ɽo-m+ɽia*    *ɽdika*    *ɽike<sup>\*34</sup>* *ɽipe*            *ɽo-m-e*    *ɽdu-gw<sup>e</sup>*  
 行-3+EXPL 行-3+EXPL 行-3+EXPL (部族名) 家 上方.あの 行-3-em 言-3.IND  
 「そこで二人の娘は道を砂糖黍をしやぶりながらずつと行きディカ族の地域に行つたさうです。」

(81) *ɽo-una*    *ɽbola* *ɽgol*            *ɽd*    *ɽyo-m-e*    *ɽdu-gw<sup>e</sup>*  
 行-3.MK 豚 豚祭 (VN) LV.INF 有-3-EM 言-3.IND  
 「ここでは豚祭りが行なはれてみたさうです。」

(82) {*ɽp-rere*} *ɽkuml-m<sup>\*35</sup>*    *ɽyal-m*            *ɽi=ɽrae=ɽwe*    *ɽena*    *ɽu*            {*ep*} *ɽwai* *ɽone* *ɽtia* *ɽp*  
 (行-SS) 青年-3.POSS 男-3.POSS DEM=MK=PF さて 来.INF え 好 真 甚 行.INF  
*ɽkor-m-e*            *ɽdu-gwe*  
 COMPL-3-EM 言-3.IND  
 「(行つて...) 件の若者の方はと言へば、(え) 全く非常に美しくなつたさうです。」

(83) *ɽpul*    *ɽbol*            *ɽkor-m+ɽia*            *ɽkuml-m=ɽrae*    *ɽula#ɽkre* *ɽmol*    *ɽkor-e*  
 刃 切.INF COMPL-3+EXPL 青年-3.POSS=MK 美麗 居.INF COMPL-SS  
 「竹ナイフで切り込みを入れたので若者は全く見目麗しくなつて」

(84) *ɽena*    *ɽapane<sup>\*36</sup>*    *ɽkorai=ɽrae*    *ɽpl*            *ɽkor-e*  
 さて アパネ草 腰蓑=MK 着.INF COMPL-SS  
 「さてアパネ草の腰蓑をつけて」

\*34 *ɽike* は住居を表はすほか部族名を伴ひその居住地域を指す。

\*35 三人称所有者接辭は指示語的な用法 (直示、照應) をもつ。ここでは指示語的用法で使はれてゐる。

\*36 アパネ草の纖維を飾りとしてつけた美しいものを着用してみたといふこと。

- (85) *ʋapane* ʃ*sm=ʃrae* ʃ*de* ʌ*kor-e*  
 アパネ草 帯=MK 締.INF COMPL-SS  
 「アパネ草の帯を締めて」
- (86) *ʋoo* ʌ*dike* *ʋapane* ʌ*dike=ʃrae* *ʋmool-e* ʌ*kor-e*  
 手.3.POSS 腕環 アパネ草 腕環=MK 穿-INF COMPL-SS  
 「腕環を、アパネ草の腕環をはめて」
- (87) *ʋkal* ʃ*kane=ʃkane* ʌ*i=ʃrae* ʌ*el* ʌ*el* ʌ*el* ʌ*el* ʌ*kor-e*  
 物 種々 DEM=MK 作.INF 作.INF 作.INF 作.INF COMPL-SS  
 「いろいろなことをして」
- (88) *ʌoon* ʌ*kol* *ʋkukl-e*  
 鼓 張.INF 抱-SS  
 「太鼓を持つて」
- (89) ʃ*p* ʃ*p* ʃ*i* ʃ*p-re* ʃ*bo* ʌ*gapl<sup>e</sup>* ʃ*i=ʃrae* ʃ*dule* ʌ*bol* ʃ*p*  
 行.INF 行.INF 取.INF 行-SS 砂糖黍 皮 DEM=MK 從 (VN) LV.INF 行.INF  
 ʃ*p* ʃ*p* ʌ*dika* *ʋike* ʌ*ipe* ʌ*o-m=ʌba* ʌ*kore*  
 行.INF 行.INF (部族名) 家 上方.あの 行-3=だが<sup>3</sup> ところで  
 「出かけると、砂糖黍の皮について行き遙かディカ族の地域に行つたのです<sup>3</sup>」
- (90) *ʌipal* *ʋekn=ʃrae* — ʌ*bola* ʌ*gol* ʌ*el* *ʋyo-m+ʃia* — *ʋekn* ʌ*el-m=ʃba* ʌ*yal=ʃrae*  
 人 飾=MK 豚 豚祭 (VN) 作.INF 有-3+EXPL 飾 作-3=だが<sup>3</sup> 男=MK  
 ʃ*p* {*ʋike*} *ʋkiine* ʌ*bnane* ʌ*ile* *ʋpai* ʌ*kor-e*  
 行.INF (家) 隅 端 水平.あの 臥.INF COMPL-SS  
 「人が飾りを — 豚祭りなので — 着飾つてゐるのですが、男は (家...) 隅つこに行つて陣取つて」
- (91) *ʌoon* ʃ*i=ʃrae* ʌ*yu* *ʋel* ʃ*s* ʌ*mol-gwa* ʃ*i=ʃrae*  
 鼓 DEM-MK 徒 斯様 打.INF 居-3.SRD DEM=MK  
 「太鼓をただこんな風に打つてみると」
- (92) *gil* *gil* *gapal* *gapal* *gil* *gil* *gapal* *gapal* ʃ*d* ʌ*mol-m-e* ʌ*du-gwe*  
 (擬音) (擬音) 言.INF 居-3-EM 言-3.IND

「ギルギル、ガバルガバル、ギルギル、ガバルガバルと鳴つたと言ひます。」

- (93) ɽd ʌmol-m+ɽia {ʌyal=ɽrae ʌpl-ere=ʌwe e} ɽgi ʌsu ʌi=ɽrae ʌpl-ere=ʌwe  
 言.INF 居-3+EXPL 男=MK 聞-SS=PF え 娘 二 DEM=MK 聞-SS=PF  
 ɽaya ʌoon ʌsu-gwa ɽila gil gil gapa gapa ɽd ʌd-m+ɽia\*37 ɽne  
 わあ 鼓 打-3.SRD 内 (擬音) 言.INF NVS-3+EXPL 我々 (EXCL)  
 ʌyal ʌsu=ɽta ʌkaa-ne ʌdal ʌd-m+ɽia=ɽd ʌkan-gwa ɽte=ɽrae  
 男 二=或 名-1NSG.POSS 呼.INF NVS-3+EXPL=Q 見-3.SRD DEM=MK  
 「それで(男はそれを聞いて、いや)二人の娘はそれを聞いて、あらまあ太鼓がギルギ  
 ル、ガバルガバルと鳴つてゐるわ、私たち二人の名前を呼んでゐるわと見たところ」

- (94) ʌkuml-m ɽti=ɽrae ʌnene ɽula#ɽkre ʌmol ʌkor-m<sup>e</sup> ʌdu-gw<sup>e</sup>  
 青年-3.POSS DEM=MK 自 美麗 居.INF COMPL-3.EM 言-3.IND  
 「若者ときたら全く見目麗しくなつてみたさうです。」

- (95) ʌyale ʌkupe ʌgla ʌmur-gwa ʌti=ɽrae ɽu ʌkuml ɽula#ɽkre ɽp-re  
 男 夢 口.3.POSS 嚙-3.SRD DEM=MK 來.INF 青年 美麗 行-SS  
 ʌo-m-e\*38 ʌdu-gw<sup>e</sup>  
 行-3-EM 言-3.IND  
 「クペ・グラ・ムルングワさんが見目麗しき若者になつてゐたと言ふのです。」

- (96) ɽgi ʌsu ʌi=ɽrae ʌkare ɽp ʌkau ɽp ʌkol-m-e ʌdu-gw<sup>e</sup>  
 娘 二 DEM=MK 既 行.INF 交際 行.INF 密着-3-EM 言-3.IND  
 「娘二人はすぐ仲良くなつて寄り添つたさうです。」

- (97) ʌkol-m+ɽia ʌkuml-m ʌi=ɽrae ʌkare ʌaul ɽi-re ɽu ʌipe ʌo-m-e  
 密着-3+EXPL 青年-3.POSS DEM=MK 既 帯同.INF 取-SS 來.INF 上方.その 行-3-EM  
 ʌdu-gwa ʌipe  
 言-3SRD 上方.その  
 「それで若者はすぐに(娘達を)すぐ上の方に連れて行つたと言ひます。」

\*37 ɽd ʌdm+ɽia が(言.INF NVS-3+EXPL)なのか(Q 言-3+EXPL)なのか文脈から必ずしも明らかではないが、その直前に明らかな gil gil gapal gapalɽd(擬音) 言.INF)があり次に明らかな NVS があるので同様に解釋する。

\*38 動いてゐるので動詞 ɽp-「行く」を使つてゐるが日本語で「ゐる」といふのにあたる。

- (98)  $\lambda dle$   $\lambda kople$   $\lambda o-m-e$   $\lambda du-gwe$   
 石の一種 石 行-3-EM 言-3.IND  
 「(上の方とは) ドゥレ・コプレに行つたと言ひます。」
- (99)  $\Gamma p$   $\lambda kor-e$   $\Gamma gi$   $\Gamma ta$   $\Gamma i$   $mol-\lambda a-m+\Gamma ia$   $\Gamma gi$   $\Gamma ta$   $\Gamma i$   $\Gamma er^e$   $\lambda p-o$   
 行.INF COMPL-SS 娘 別 DEM 居-FUT-3+EXPL 娘 別 DEM 去 行-IMP  
 $\lambda d-m-e$   $\lambda du-gw^e$   
 言-3-EM 言-3.IND  
 「一方の娘は残ることにしてもう一方の娘は去りなさいと言つたさうです。」
- (100)  $\lambda ena$   $\lambda mol-gwa$   $\lambda gal$   $\lambda i$   $\lambda kul$   $\lambda yo-gwi=\lambda we$   $\lambda kul$   $\lambda ye-re$   $\lambda ipe^{*39}$   $\Gamma s$   
 さて 居-3.SRD 子 DEM 産.INF 有-3.DEM=PF 産.INF 有-SS 分配 (VN) LV.INF  
 $\Gamma u$   $\lambda o-gwa^{*40}$   
 来.INF 行-3.SRD  
 「そして子供を産んで、取り分けながら暮らして」
- (101)  $\Gamma ne$   $\lambda yal=\Gamma kane$   $\lambda mala$   $\lambda el$   $\lambda i$   $\lambda pai$   $\Gamma u$   $\lambda o-pgi$   
 我々 (EXCL) 男=達 近 あたり DEM 住.INF 来.INF 行-1NSG.DEM  
 「我々が今ここにこの地域に廣がつてゐるわけで」
- (102)  $\lambda stori$   $\lambda du-gwa$   $\lambda p-pga$   $\lambda i$   $\lambda tumbuna$   $\lambda ipe$   $\lambda stori$   $\lambda du-gwa$   
 話 言-3.SRD 聞-1NSG.SRD DEM 祖 上方.あの 話 言-3.SRD  
 $\lambda p-pga$   $\lambda i$   $\{\lambda gore\}$   $\Gamma wa-m$   $\lambda kul$   $\lambda yo-gwa$   $\lambda i=\lambda we$   
 聞-1NSG.SRD DEM (氏族名) 息子-3.POSS 産.INF 有-3.SRD DEM=MK  
 「話を聞いたところでは、ご先祖が話したことを聞くに、(ゴレ)、産んだ息子といふのは」
- (103)  $\lambda gore=\lambda we$   $\Gamma kwiwa=\lambda we$   $\lambda du-gwa$   $\lambda i=\lambda we$   $\lambda vene$   $\lambda nuul=\lambda wa$   $\lambda kuman=\lambda wa=\Gamma d$   
 (氏族名)=PF (氏族名)=PF 言-3.SRD DEM=MK さて (亞氏族名)=PF (亞氏族名)=PF=Q  
 $\lambda kaa$   $\Gamma kane=\Gamma kane$   $\lambda ye$   $\lambda kor-gwa$   $\lambda i=\lambda we$   
 名.3.POSS 種々 命名.INF COMPL-3.SRD DEM=MK  
 「ゴレ、クイワと言ふのと、それからヌールとかクマンとか名前を様々につけたのが」

\*39 部族、氏族、亞氏族などの単位は儀禮において食べ物の分配を受ける単位として象徴的に表現される。こ  
 こでも「さまざまの集團に分かれて暮らす、分かれていつた」ことを表はす。

\*40  $\Gamma u$   $\Gamma p-$  (来.INF 行-) はあちこちに分布することを表はす。

- (104) *ʋnɪl=ʔku ʋpa-gwa ʋalwa#ʌkama ʋma-n<sup>\*41</sup> ʋalwa#ʌkama=ʌya ʌmol-gwi*  
 (氏族名) 住-3.SRD (人名) 母-2.POSS (人名)=や 居-3.DEM  
 「(その一つが今の)ヌール・ク氏族でアルワ・カマ、お前の伯母さんであるアルワ・カマなどの人たちで」
- (105) *ʔte ʌkuman=ʌwe ʌdu-gwa ʌi=ʌwe ʌkuman=ʔkane ʋpa-gwa ʔila*  
 それから (氏族名)=PF 言-3.SRD DEM=MK (氏族名) 住-3.SRD 内  
*ʌile ʋdaware ʌile ʋpa-gwi*  
 水平.あの (地名) 水平.あの 住-3.DEM  
 「それからクマンと言ふのはその奥に住むクマン・カネ、ほらあつちのダワレに住んでゐる」
- (106) *ʔen ʋdaware ʔta ʋkan+(ʋ)k-ge*  
 汝 (地名) NEG 見 +NEG-2.IND  
 「お前はダワレは見たことがなかつたね」
- (107) 千田: *ʔta ʋkan+(ʋ)ki-ke*  
 NEG 見 +NEG-1SG.IND  
 「見たことはありません。」
- (108) *ʔta ʋkan+(ʋ)k-n-a*  
 NEG 見 +NEG-2-EXPL  
 「さうだつたね。」
- (109) *ʋena ʔkum=ʔwa ʌdu-gwa ʌi ʋena ʋa=ʔde ʋkapama<sup>\*42</sup> ʌmol-gwa ʋnene*  
 さて (氏族)=PF 言-3.SRD DEM さて (人名) 母方親戚 居-3.SRD 我々 (INCL)  
*ʌime ʌo-pɣnae*  
 下方.あの 行-INSG.MK  
 「それからクムといふのが、ええ、アデの母方親戚でお前も一緒にその下方地域を訪ねたね」

<sup>\*41</sup> ある人物を聞き手である本稿筆者の「母」と呼んでゐる。ある程度親しい関係にある者は餘所者であつても親族関係になぞらへて位置づけられる。なほ、ドム語では父方の父母はみな概義の父母と呼ぶことができ、正確にはここでは筆者の「父」の姉にあたる人物をさしてゐることから「伯母」と譯した。

<sup>\*42</sup> 話し手(女性)が自分の出身氏族のことを子供 Ade を基準にして母方親戚と呼んでゐる。このやうに子供を基準にした親族表現は珍しくない。ここでは聞き手である筆者が話し手の「子」にあたる関係(Adeの「兄弟」)であること踏まへると聞き手への配慮も影響した可能性がある。

(110) *ʋena ʋel ʎel-gwa ʎkul ʎer-gwa ʎipe ʎsu-gwa ʋpai ʎu*  
 さて 斯様 作-3.SRD 産.INF 出-3.SRD 分配 (VN) LV-3.SRD 住.INF 来.INF  
*ʎo-pge*

行-1NSG.IND

「さてかういふ具合で産んだ子が、分け前を取り分けながらここ一帯に住んで  
 ます。」

(111) *ʋpai ʎu ʎo-pn-a ʎne ʎepal ʎmala ʎi ʎbola ʋki-gwa=ʎya*  
 住.INF 来.INF 行-1NSG-EXPL 我々 EXCL 人 近 DEM 豚 炊-3.SRD=や  
*ʋkal=ʎta ʎel-gwa ʎi=ʎwe*

事=或 作-3.SRD DEM=PF

「そして我々はここで豚を料理するとかなにか起きた時には」

(112) *ʎkape ʎgurau\*43 ʎtamne\*44=ʎya ʎbal ʋke-gwa ʎi ʎdle ʎkople ʎipe=ʎwa*  
 動物 パンの木 羊齒の一種=や 刈.INF 炊-3.SRD DEM 石の一種 石 上方.あの=PF

*ʎkape ʎtamne ʎne-re ʎu-pga ʋmo-pn=ʎwa=ʎd ʎgurau ʎtamne ʎi*  
 動物 羊齒の一種 食-SS 来-1NSG.SRD 居-1NSG=CF=Q パンの木 羊齒の一種 DEM  
*ʋau ʎwai ʎel-e ʎno-gwe*

握.INF 好 作-SS 食-3.IND

「肉に山菜など採つて料理する時には、我々はドゥレ・コプレで肉、山菜を食べてを  
 り、さうしてやつて来たんだと言つて山菜をちやんと準備して食べるんです」

(113) *ʎne-re ʎel-gwa ʋel ʎel-gwa ʎya ʎel-m=ʎua ʎdu-gw<sup>e</sup>*  
 食-SS 作-3.SRD 作.INF 作-3.SRD TS 作-3=CF 言-3.IND

「それで、そのためにあれだと言ふんです。」

(114) *ʎepal ʎu-gwa ʋpa-pn=ʎwa=ʎd ʎstori ʎdu-gwa ʎi*  
 人 来-3.SRD 住-1NSG=CF=Q 話 言-3.SRD DEM

「かういふ出自をもつてみると話をしたもので」

\*43 ドムではパンの木は若葉のみを食用にする。

\*44 パンの木の葉と食用羊齒は耕作によらず野山で採る野菜の代表格として並び稱される。これらは肉とともに煮炊きすると美味であるとされる。ドムの故地ドゥレ・コプレが野山の野菜に富んでいたので、それを記念して、ドム諸氏族の拡散ののちもこれらを缺かさないうやうにしてあるといふ話をしてゐる。

- (115)  $\Lambda$ tumbuna= $\Gamma$ kane  $\Lambda$ ipe       $\Lambda$ stori  $\Lambda$ du-gwa  $\vee$ p-pge  
 祖=達                      上方. あの 話   言-3.SRD 聞-1NSG.IND  
 「昔のご先祖たちが話をしたのを聞きました。」
- (116)  $\Gamma$ ne               $\Lambda$ yal= $\Gamma$ kane  $\Lambda$ i       $\Gamma$ ta  $\vee$ kan+( $\vee$ )k-pge  
 我々 (EXCL) 男=達              DEM NEG 見 +NEG-1NSG.IND  
 「私たちは見たわけではありません。」(傳へ聞いた話である)
- (117)  $\Gamma$ ta  $\vee$ kan+( $\vee$ )k-pn-a       $\Lambda$ tumbuna  $\vee$ kware  $\Lambda$ tumbunane  $\Gamma$ kona  $\Lambda$ ipe  
 NEG 見 +NEG-1NSG-EXPL 祖              既      祖              等      上方. あの  
 $\Lambda$ stori  $\Lambda$ du-gwa  $\vee$ yel  $\Lambda$ du-gwa  $\vee$ p-pga               $\Lambda$ du-gwe<sup>\*45</sup>  
 話   言-3.SRD 斯様 言-3.SRD 聞-1NSG.SRD 有-3.IND  
 「先祖が、ずっと昔の先祖が話をすることにこんな風に言つたのを聞いたのです。」

#### 略號一覽

{...}	言ひ誤り	DU	雙數	NEG	否定
=	接語境界 (ゆるい)	EM	表出法	NPINT	非肯否疑問
+	接語境界 (かたい)	EXCL	除外	NSG	非單數
#	語彙的句内語境界	EXPL	説明法	NVS	非視覺知覺
1	一人稱	FUT	未來	PERM	許可法
2	二人稱	IMM	將然	PF	句末
3	三人稱	IMP	命令法	PINT	肯否疑問
ADV	副詞化	INCL	包括	POSS	所有者接辭
CF	節末	IND	直說法	Q	引用標識
CL	類別用法	INF	連用形	SG	單數
COMPL	完全相	IPFV	非完結相	SRD	從屬法
CRAN	クランベリー形式	LOC	場所化詞、場所化辭	SS	同主語接續
DEM	指示詞	LV	輕動詞	TS	臨時代替
DS	異主語接續	MK	共有知識	VN	動名詞

<sup>\*45</sup> 從屬法動詞に  $\Lambda$ dugwe 「ある」(コピュラ的にもはたらく)が後續する構文は背景理由説明などに使はれ、意味的・形式的にも日本語のノダ文に通じるところがある。ここでは「見たわけではないが傳へ聞いたのだ」あるいは「傳へ聞いたのでここにお話しする次第だ」といつたニュアンスをもつ。

## 参考文献

- Bergmann, Wilhelm (1966) *Wörterverzeichnis der Kuman Sprache gesprochen im Inland von Neuguinea im Chimbu District*. typescript. (460pp copy held in SIL library).
- Brown, Paula (1970) “Chimbu transactions”. *Man*, 5 (1), 99–170.
- Brown, Paula (1972) *The Chimbu*. Shenkman Books.
- 畑中幸子 (1975) 『われらチンブー』. 三笠書房.
- Hide, Robin (1979) *A checklist of some plants in the Territory of the Sinasina Nimai (Simbu Province, Papua New Guinea): with notes on their uses*. No. 54 in Working papers in anthropology archaeology linguistics Maori studies. Dept. of Anthropology, University of Auckland.
- Nilles, John (1950) “The Kuman of the Chimbu Region, Central Highlands, New Guinea”. *Oceania*, 21 (1), 25–65.
- 大塚柳太郎 (2002) 「ニューギニアという地域、そして人びと」. 『ニューギニア－交錯する伝統と近代』, 序章, 3–22. 京都大学学術出版会.
- Tida, Syuntarô (2002) “Dom Texts (2) ‘Frog’, ‘Palele’ and ‘Snake’”. 『環南太平洋の言語』, 2, 26–52.
- Tida, Syuntarô (2006) *A Grammar of the Dom Language*. Ph. D. thesis, Kyoto University.
- 千田俊太郎 (2011) 「東シンブー諸語サブグループピングに向けて」. 『地球研言語記述論集 3』, 153–182.
- 吉田正紀 (1972) 「ニューギニア高地の豚祭り：研究史と問題点」. 『史苑』, 33 (1), 65–81.
- 吉田正紀 (1974) 「ライ溪谷の豚祭り：パプア・ニューギニア南部高地の事例から (地理学特集号)」. 『史苑』, 34 (2), 74–85.